

川の復興

歌津てんぐのヤマ学校(旧歌津VC)

南三陸町歌津の「伊里前川(いさとまえがわ)」は、平成14年9月にアザラシの「ウタちゃん」が遊びにきた川としてもその名を知られています。

この伊里前川の春の風物詩が「シロウオ漁」。

川にW字型の石垣『ザワ』を組み、潮の満ち引きに合わせて上ってくる魚を誘い込むという珍しい漁法です。

「歌津てんぐのヤマ学校」では、5月20日の「しろうおまつり」に向け、伊里前川の清掃と『ザワ』の復旧に取り組みました。



例年シロウオ漁の『ザワ』を組んでいた流域は、地震の際の地盤沈下で海水になり、深くなってしまうため、以前よりも上流に上ることになりました。

適したサイズの石は津波で流されたため、河原の石をひたすら運びます。(これが地元ではおばあちゃんの仕事だというから驚き!) 石についている魚の卵やカキの子供、泳いでいる稚魚を発見しては、以前の状態に戻ってきていることを確認しました。



シロウオ



シロウオ

『シロウオ(素魚、ハゼ)』と『シラウオ(白魚、シラウオ科)』(『おさかな図鑑』より)

実際に漁が始まるのは4月20日、川の地形や生態系が津波で変わり、その復元には長い年月がかかります。今年シロウオがどこまで上ってくるかは、その時になってみないと分からないそうです。



最盛期を迎えたシロウオ漁、川には2年ぶりにW字型の『ザワ』が並んだ(19日正午頃、河北新報社)

川の清掃では、潮が引くに従って下流の方に進むと、それまでは目につかなかった洋服やビデオテープ、掛け時計、サッシの破片、中には3m近いパイプなどが次々に現れ、震災の爪痕を改めて感じ、まだまだ人の手が必要なんだと実感させられました。
しかし、清掃場所において簡易の仕掛けには、待望のシロウオが、たった一匹ですが掛かってくれました。『さえずりの谷』から散策にやってきた馴染みの子供たちも、大喜びで覗き込んでいました。
シロウオは、全国的にも数が減っている希少な魚だそうです。
震災でこれだけ大きな傷跡が残されたにもかかわらず、「おかげで新しい風が吹いた、ゼロからスタートする喜びは残った」と語ってくれる地元の人々の、自然に寄り添って生きようとする姿勢が、シロウオを再び伊里前川に呼び戻してくれることを祈ってやみません。
※「しろうおまつり」では、ヤマ学校もブースを出して、生態観察やクイズを楽しみます!

「東北に黒糖を送ろう! 大作戦しんぶん」改め

復興支援『すけさきた』

「すけさきた」とは

宮城県登米市あたりの言葉で「ホラソテアに来たよ」という意味である。

小満朝日



次回「小満朝日号」に続く

生活復興支援

- 5/27 余語晶子さん西表から唐桑VCへ(5/29-6/5) 「いちゃりばちよーでー」を流行らせる
- 5/29 旧本吉町の大沢コミュニティで、地元有志による避難所が、緊急避難の時期を終えたとして解散
- 6/1 女性支援センター(RQW) 発足(正式スタートは6月中旬) 唐桑で種力キの挟み込み作業開始 西表島エコツーリズム協会では黒糖募金を終了、活動支援募金を開始

生活再建支援

ふりかえり企画

RQ活動年表

緊急支援期を過ぎ、『モノからヒト』へニーズが変化していった時期 中長期的支援のためのシステムの構築(RQWの設立など)は、この頃から活発になってきた